

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一11:2~16 「女とかぶり物」

[2] 「さて、あなたがたは、何かにつけて私を覚え、また、私があなたがたに伝えたものを、伝えられたとおりに堅く守っているのです、私はあなたがたをほめたいとおもいます」パウロは、ここからは教会内の秩序について教えていく。コリント教会には様々な問題があったが、そのような彼らの中に、なおほめるべき点をあげて愛による配慮を示す。実際にコリント教会のすべての人々に問題があったのではなく、それは一部の人々であり、他の人々はパウロの伝えたことを堅く守っていたのであろう。

[3] 「しかし、あなたがたに次のことを知っていただきたいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です」

実はこの時コリント教会の一部の女性が福音の自由をはき違えて、教会の秩序を乱すと言う出来事があった。それは頭にかぶり物を着けずに礼拝に出ているということであった。何が問題かと思われるが、2千年前の風俗、習慣は今とは違ったということをも知らなければならない。救いや恵みに関しては男性も女性も何の区別もない。→ガラテヤ3:26~28 しかし、創造の秩序においては男と女には違いがある。パウロはここで、神→キリスト→男→女、という秩序を教える。三位一体の子なる神キリストは父なる神に従われる。キリストにあって最初の間人アダム、男が創造された。→コサ1:16、アダムのあばら骨を取ってエバ、女が造られた。→創世記1~2章 これが創造の秩序である。

[4-5] 「男が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物をつけていたら、自分の頭をはずかしめることとなります。しかし、女が祈りや預言をするとき、頭にかぶり物をつけていなかったら、自分の頭をはずかしめることとなります。それは髪をそっているのと全く同じことだからです」 「かぶり物」とは頭全体を覆うベールのようなもの。

当時の習慣では女性はベールをかぶることが当然であり、そこに女性の権威と尊厳とが込められていた。もしベールをしていなかったら、ふしだらな女とみられても文句は言えなかった。ところが教会の中ではある婦人たちが福音の自由をはき違えて、ベールを取り払って礼拝に参加していた。ここに当時のギリシヤ文化の影響が見られる。

[6-10] 「女がかぶり物を着けないのなら、髪も切ってしまいなさい。髪を切り、頭をそることが女として恥ずかしいことなら、かぶり物を着けなさい。男はかぶり物を着けるべきではありません。男は神の似姿であり、神の栄光の現れだからです。女は男の栄光の現れです。なぜなら、男は女をもとにして造られたのではなく、女が男をもとにして造られたのであり、また、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。ですから、女は頭に権威のしるしをかぶるべきです。それも御使いたちのためにです」

教会で自分の美しい髪を見せるためなどのこの世的な動機でベールをかぶっていない女性は髪を切り、頭もそってしまいなさいと言う。当時、髪をそっている女性は奴隷、遊女、不倫の女と言われていた。パウロはそれが恥ずかしいならかぶり物を着けなさいと言う。ここで彼はもう一度、創造の秩序から語り出す。創世記によれば、まず男が「神のかたち」に創造され、地上の支配権が託され、その後、女が男から造られた。それゆ

え、これらの点において特に男は「神の似姿であり、神の栄光の現れ」と言われる。一方、女は地上の支配者、統治者として神の栄光を現す者ではなく、男の中にあつた神のかたちを受け、また、それを現した意味において「女は男の栄光の現れ」と言われる。神はまず男を造られ、そのふさわしい助け手として男のあばら骨を取って女を造られたのである。「権威のしるし」とは男が女に対して権威を持っていることのしるし。「御使いたちのために」とは御使い（天使）たちも人間の男女の関係が正しく維持されているかどうかに関心を持って見守っているからと考えられている。

[11-12]「とはいえ、主にあっては、女は男を離れてあるものではなく、男も女を離れてあるものではありません。女が男をもとにして造られたように、同様に、男も女によって生まれるのだからです。しかし、すべては神から発しています」

女性が男性に従うのは奴隷のように従うのではない。互いに相違しながら、互いに依存し、助け合い補い合う存在であり、男も女もその起源は神から発しているのであり、共に神に従うべき存在なのである。

[13-16]「あなたがたは自分自身で判断しなさい。女が頭に何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。自然自体が、あなたがたにこう教えていないでしょうか。男が長い髪をしていたら、それは男として恥ずかしいことであり、女が長い髪をしていたら、それは女の光栄であるということです。なぜなら、髪はかぶり物として女に与えられているからです。たとい、このことに異議を唱えたがる人がいても、私たちにそのような習慣はないし、神の諸教会にもありません」

男が短髪であることは、その活動、労働上、また自然の本性上、当然であり、逆に自然そのものが女性にかぶり物として長い髪を与えているのも事実である。その自然の教訓に従って、女が礼拝の時にかぶり物を着けることのふさわしさを知ることができるという意味がここにはある。それでもなお異議を唱える人には、パウロは神の諸教会の習慣に訴えて、それ以上は議論しない。

救いや恵みに関しては男も女もどんな人でも区別はない。しかし、教会や礼拝における秩序に関しては、どのような状態であっても良いというのではなく、求められるべき秩序がある。パウロはそれを創造の秩序から、自然の求める姿から、そして神の諸教会の習慣に訴えて教えている。この原則からは、いつの時代の信仰者も学ばなければならない。